

追跡調査のスタンダード

—柳井・及川・伊藤・萱間・菱沼・堀内・井部論文へのコメント—

倉元直樹（東北大学）

身の程知らずの大風呂敷を広げるようで、改めて口に出すのも恥ずかしいが、ここ数年、「大学入試学 (admission studies)」の必要性を思っている。自分が生かされているこの社会にとって、大学入試に関わる研究が一つの専門性を持つ学問分野として成立していることが大切だと感じるのだ。今更、耳新しいことではないが、未来を担う子どもたちを育てるための様々な教育的課題に対して、現実的条件に根ざした実証的基盤に基づく合理的な判断がなされる社会になって欲しい。教育に関わる者には共通の思いであろう。それを支える学問分野の成立が必要だと思うのだ。そういう意味で、我が国の教育の現状では大学入試ほど可能性を秘めた分野はないだろう。

それでは、大学入試学の成立のためには何が必要なのか。

まず、専門的職業人としての身の置き所である。かつて、大学入試研究に携わろうとする者にとって、大学入試センター研究開発部が公に認められた唯一の職場であったと思われる。それが、国立大学を中心にアドミッションセンターができて専任教員のポジションが設けられたことにより、受け皿となる間口が広がりつつある。

研究仲間が集まる共同体 (academic community) も必要だ。言い換えれば「学会」ということになるだろう。この入研協こそが、大学入試学のための学会の第一候補であり、「大学入試研究ジャーナル」が学会誌の役割を果たすべきものと考えられる。ところが、入研協は短いサイクルでほとんどの構成員が入れ替わってきた。誰を構成員と定義すべきなのかという問題は残るが、多くの人は外部には閉じられた年次大会に

何度か顔を出し、そして去って行く。学術的活動の基盤を長期間置く者が少ないということは、年次大会がどれほど盛大でも、学問的共同体として成長しづらいことを意味する。入研協の組織が持つこの特徴は、通常の学会とは異なる特殊な環境であり、安定的な専門知の継承を難しくしてきたと思われる。

そして、肝心の継承すべき専門知である。これは、豊富とまでは行かなくとも、既にある程度の蓄積がある。例えば、追跡調査。大学入試研究ジャーナル創刊号をひも解くと、掲載された 10 編の論文のうち、前半の 5 編が追跡調査によって入学者選抜の方法を評価する試みである。追跡調査では入学試験の成績と入学後の成績指標の相関係数が選抜方法の予測的妥当性を意味する指標として使われることが多い。実証的な教育改善への試みと言う意味では、追跡調査研究ほど魅力的な研究テーマはないだろう。ところが、ここに大きな落とし穴がある。それは、選抜効果として知られてきた問題だ。選抜に用いられた成績は不合格者の入学後の成績というものが存在しないので、受験者集団では予測的妥当性が高かったとしても、見かけ上、入学後の成績との相関係数が小さくなる。選抜に用いられない指標は選抜による影響が小さい。したがって、相関係数を単純に比較して選抜資料の妥当性を判断するのは明白な誤りである。

入研協ジャーナルの刊行以前、肥田野直大学入試センター研究開発部長（当時）が研究代表者となり、昭和 56 (1981) ~ 58 (1983) 年度の 3 年間、科学研究費補助金による大学入試研究プロジェクトが行われた。そのプロジェクトには、25 大学から研究分

担者としての参加があった。そこでは選抜効果の問題も取り上げられ、追跡調査における相関係数の処理と解釈について、レクチャーが行われていた。さらに、平成 3 (1991) 年度の大学入試研究ジャーナル創刊号では、5 編のうちの 2 編で選抜効果について触れられており、それを十分に意識した分析や解釈が行われていた。興味深いことに、肥田野科研の報告書の中には、創刊号当時の入研協会長であった熊本芳朗先生 (電気通信大学 [当時]) のお名前を見つけることができる。さらに、創刊号で選抜効果の修正公式を用いた研究発表をなされたのは、前会長の村上隆先生 (名古屋大学 [当時]) であった。それにも関わらず、同時に掲載された残りの 3 編のうちの 2 編の論文では、選抜効果が存在する条件下で相関係数をそのまま解釈する誤った解釈がなされており、その後も同じような分析が繰り返し行われ続けてきた。選抜効果という概念は、継承されるべき大切な専門知であるはずだ。ところが、尊敬すべき大先輩たちのご尽力にも関わらず、入研協という場で、それが受け継がれることはなかった。共通 1 次導入以前のボタンの掛け違い (木村 [2007] 教育社会学研究第 80 集, 165-186.) が未だに尾を引いているのは残念である。

さて、前置きが長くなってしまったが、柳井他論文へのコメントである。この研究は、大学入試学の誕生に向けて重大な意味を持つと私は考える。相関係数の補正に用いられた方法がどれほどデータの性質に合致しているのか、分析結果の精度や安定性はどの程度のものなのか、といった細かい点で議論の余地はあるだろうが、「相関係数を用いた追跡調査が備えるべきスタンダード」を示した論文である。以後の追跡調査研究は、この論文を先行研究として必ず引用すべきだ、と書くと、少々、調子に乗り過ぎかもしれないが。

ただし、課題も残る。大学入試学の大切

な成立要件として、現実の選抜方法や教育方法の改善に実質的に寄与することが上げられる。大学入試という特定のテーマを持つ学問分野が、純粋学問として成立することは有り得ないからだ。誕生前から、「役に立たなければ居場所がない」という宿命を負っている。その観点に立てば、この研究が S 大学の教育改善にどのように生かされていくか、今後の成果が注目される。すなわち、例えば、入試の小論文の評価方式の改善といった形で具体的な問題解決につながっていくことを期待したい。

平成 17 (2005) 年の旧入研協最後の大会で追跡調査に関する研究発表をさせていただいたとき、「選抜効果の再発見に関する 10 年周期説」というジョークで内々に盛り上がったことを思い出す。しかし、10 年後にも同じジョークが同じように通用する状況は想像したくない。大学入試学が成立可能だとすれば、それは単一のディシプリンではカバーし得ない。10 年後には、様々な分野からのアプローチによって進歩した「大学入試学」が存在していて欲しい。

我ながらうざったいことを書いてしまった。確かに鬱陶しい。しかし、しつこく言わせてもらえば、どんな学問でも、学問共同体のメンバーになるにはある程度の面倒なトレーニングを積んだ上での専門性が要求されるべきなのだろう。レトルトパックを暖めるような手軽さで、「電子レンジでチン」して入試研究者を作ることは出来ない。そう考えると、最後に残される課題は専門的入試研究者の育成システムという話になる。そう愚考する次第である。

後に連なる者としては、偉大な先輩たちがあらゆる困難を乗り越えて開拓してくださった細い足跡を何とかたどりつつ、いつかは皆が行き交う大街道へと広げていきたい。生意気な言い草に響くかもしれないが。